

2020年度の大学入試改革 高校生「学習離れ」防げず

2019/8/12 5:30 | 日本経済新聞 電子版



大学入学共通テストの試行調査に臨む高校生（2018年11月、東京都目黒区の東京大学）

高校と大学の教育、大学入試を一体で変えようという教育改革が進行中だが、浜中淳子早稲田大学教授は、大学入試を変えることで高校教育を変えようという手法には限界があると指摘する。

新しい大学入試が始まる2020年度が迫ってきた。具体的な実施方法の公表や改革への不安をまとめた要望書の提出など、様々な動きを目にするが、昨今の流れを見ていると1つの疑問が湧き上がる。「高校生の学習離れ」という重要な観点が置き去りにされているのではないか。

00年代を中心に高校生の学習時間の減少が話題になった。とりわけ学力中間層の学習時間が激減している。少ない教科数で受験可能な大学の増加が学習領域を狭めていることも問題視された。はたして、今の高校生はどのように学習に向き合っているのか。学習離れの実態を紡ぎ出そうとした私たち研究グループの調査からは「中間層の地盤沈下」とでも表現できる実態がみえてきた。

私たちは12年4月からの3年間、首都圏の公立高等学校に通う生徒約3300人を対象に学習行動に関する追跡調査を行った。対象校は「地元で一番手とみなされる有力進学校（4校）」と「3～4番手ほどに位置づけられる中堅進学校（6校）」の2タイプで、入学偏差値でいえば、前者が70以上、後者は50台半ばから60台前半。いずれも進学校ではあるが、生徒の学習行動には大きな違いが認められた。

高校2年2学期のデータを3つほど紹介しておこう。（以下、本稿内で示す結果等の詳細は共著「大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか」を参照）

第1に、やはり中堅進学校生徒の学習時間の少なさが目立つ。定期テスト期を除く「ふだん（平日）」の学習時間（学校外）が30分以下だと答える生徒は7割強に上り、有力進学校生徒（2割）とは対照的だ。

さらに、こうした状況でも中堅進学校生徒は「自分は勉強を頑張っている」と主張する傾向にある。中堅進学校では、学習時間が30分以下でありながら「勉強を頑張っている」と答える生徒は32.5%、3人に1人の割合である。

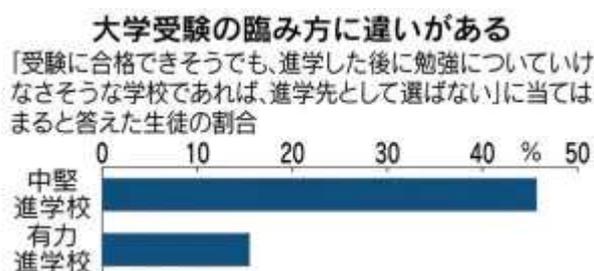
第2に、中堅進学校の生徒は、スマートフォンやテレビ等に費やす時間が多い。「インターネット、スマートフォン、携帯をいじっている」平均時間は、有力進学校62.8分に対し中堅進学校は92.6分。「テレビをみている」はそれぞれ46.7分と72.0分、「ゲームをしている」は13.4分と19.8分だった。単純に合わせて、有力進学校生徒と中堅進学校生徒の間には1時間以上の差をみることができる。



早稲田大学教授
浜中淳子

第3に、大学受験の臨み方にも違いがある。「受験に合格できそうでも、進学した後に勉強についていけないような学校であれば、進学先として選ばない」という項目に「あてはまる」と答えた生徒の割合は、有力進学校生徒15.5%に対し、中堅進学校生徒は45.7%だった。

インタビュー調査では、少なくない中堅進学校生徒から「無理をしない程度にやって、無理をしなくていい所に進学します」という趣旨の話を聞いた。



以上の3点を踏まえた上で指摘したいのは、中堅進学校の生徒は大学入試で何が課されるのかといったことにほとんど左右されない状況にあることである。学力試験を伴う入試での進学を目指すことが学習時間の増加につながるわけでもなく、推薦やアドミッションオフィス（AO）入試など学力不問入試での進学を目指すことが学習時間の減少につながるわけでもなかった。

「1年以上も先の大学入試なんて、まだ頭の中にありません」。インタビュー調査でしばしば聞いた中堅進学校生徒たちの声である。

冒頭で述べたように、新しい大学入試が始まろうとしている。英語民間試験の活用や記述式問題の導入など、変更点は多い。高校生のためになる着地点に降り立つことを願うばかりだが、そうしたなかでも考えざるを得ないのは、「それが高校生たちの学び自体にどれほどの影響を与えるのだろうか」という問いである。

スマートフォンを片手に、1日30分以下の学習時間を良しとし、無理のない進学を心掛ける様相からは、英語のスピーキングの練習などを始めることはあっても、基本的には学習から遠のいたままの生活を送る姿が描かれる。

加えて強調すべきは、中堅進学校というレベルの高校生たちでさえ、すでにこのような実態だということである。日本全国を見渡せば、学習から降りてしまっている高校生たちは、かなりの数に上るはずだ。

確かに、グローバル化への対応や表現力や思考力、主体性の育成というのは重要な観点なのかもしれない。しかしそれ以前に目を向けなければならないのは、学習から降りてしまった高校生たちの存在である。高校生の基礎学力の習得と学習意欲の喚起を目的に「高校生のための学びの基礎診断」というテストも導入されたが、大学受験や就職試験に必須でないこともあり、期待できる効果には限界がある。

私たち大人は、疑いもなく「大学入試を変えれば、高校生の学びは変わる」と語ってきた。しかしそれは「真」なのだろうか。実は、大学進学者層のほんの一部に影響を与えるにすぎないのではないか。そもそも四年制大学に進学しない、あるいは進学できない高校生たちも相当数に上るのである。

高校生の学びを豊かにするために効果的な施策は何か。日々の学校生活をどう構築するか。入試改革に飛びつく前に、エビデンスと現場の声に真摯に耳を傾けながら、吟味することのほうがよほど大事な課題であるように思われる。

■従来入試の延長、意欲の喚起困難

私立大学の4割が定員割れを起こし、えり好みさえしなければほぼ全員が大学に入れる事実上の"全入時代"が到来した現在、学力試験で入学者を選抜できる大学は中堅校以上に限られる。

ましてや、第1志望の受験生だけで入学者枠が埋まる大学はごく一部の難関大学で、学力不問入試が急拡大している。

こうした中では、従来型入試の延長線上のままで制度をいくらいじっても、高校生の学習意欲を喚起することは難しい。特に学力中下位層の"高大接続"問題は喫緊の課題だったはずなのに、今回の改革でも取り残されてしまった。（横）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.